
とりあえず異世界・・・ハア・・・orz

怒涛号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とりあえず異世界・・・ハア・・・orz

【Nコード】

N8521L

【作者名】

怒涛号

【あらすじ】

たぶん普通の高校生真雲流迅とその親友の神川光輝が異世界へ飛ばされる物語です。

主人公最強になる予定です。また、不定期更新です。そして、初投稿で初心者です。それでもおこな方は読んでくれるとうれしいです。

プロローグ

?????side

俺は真雲流迅まぐもりゆうじん。ケンカの数が多いだけの普通の高校生だ。あ、あと運動嫌いだ。まあ、そのかわり勉強は人よりできてしていると自負している。顔はパツとしない顔にメガネをかけている。

そんな俺は今、神川光輝しんかわひつひってやつと一緒に家に帰っている。こいつは超がつくくらいイケメンでお人好しついでにスポーツ万能のモテモテ野郎だ。こいつとは中学1年の時にこいつが家の隣に引越してきてそれから何かと気が合い仲良くしている。こいつとは何度も死線を潜り抜けた戦友ともであり、何度も俺を死線へほうり込んだ悪魔ともでもある(マジで)。まあ、つまりは親友ってことだ。

「なあ、リュウなんか嫌な雲だな。」

と光輝が空を見上げて言った。うむ。確かに嫌な雲だ。たまにピカッて光ったりしている。こういう重そうな雲はあれだよな。俗に入道雲と呼ばれるあれしかないな。

「そうだな。ところでコウキ。今、俺たちの真上にある雲の種類を言ってみろ。」

「うーんと、あ、あれだ。・・・クジ 雲!！」

「ブツｗｗｗｗお前それマジで言ってるの?ぶぶぶ八八八八八八八八八。何がク ラ雲だよ。小学校の国語の教科書か!正解は積乱雲だよ。マジでお前アフォだな(笑)」

そう、こいつは真性の馬鹿だ。(お勉強ができないほうの)

「うるせー。わかってたよそんなぐらいい。」

「うそつけ。ド馬鹿。」

俺は学力で高校に合格し、得待生だ。んで、光輝はスポーツで入った得待生だ。だから、こんなバカでも同じ高校に通っている。つい

でこの高校は特殊で学力得待生には黒の学ランに銀ボタン、体力得待生には白の学ランに金ボタンだ。まあ、それ以外は黒の学ランに金ボタンだ。女子の場合はそのままの色でセーラー服になったと考えると、考えればいい。

けど、四月の初めにしては珍しい雲だな。

「そついやリュウ、お前、部活何にするか決めたか？」

「いや、決めていない。ってか俺は部活入らないつもりだぞ。」

「そうなのか。まあ、オレは剣道部だけだな。」

「そりゃそうだ。」

こいつの家は剣道をやっていて、こいつは、かなり強い。

そんな雑談をしていると雨がぽつぽつ降ってきた。

「嘘だろ。オレ傘もってねー。」

「クツクツクツ。そなえあれば憂いなし。」

と俺は折りたたみ傘をカバンから、取り出した。

「リュウ！オレも入れてくれ。」

「だが断る。ってテメーなに勝手に入ってたんだよ」

コノヤロー、勝手に入ってきやがった。

「俺は、おm「ガガーーーーー！ーーーーー！！！！！！！！！！！」

俺の言葉は最後まで続かなかった。そして、あの言葉がこの世界で最後の言葉となった。

なぜなら、視界が白くなったと思ったら、全身に激痛が走り、俺の意識を刈り取ったからだ。

プロローグ（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます。どうぞいただきます。
できれば感想等お願いします。

プロローグ2 自称神、参上！！（前書き）

更新がすごく遅れました。次からももう少し早くします。

プロローグ2 自称神、参上！！

（流迅side）

「……………ん。ここどこだ？」

俺は気がつくところか知らない真っ白な場所に倒れていた。隣には、
光輝も倒れている。

「オイ、起きろ！コウキ！」

俺は光輝のわき腹を蹴った。コイツはこれぐらいやらないと起きないやつだからな。

「う、うん。ふわあ〜〜。おはよう。リュウ。」

光輝は一回伸びをしてから起きてきた。結構強く蹴ったんだけどなあ。

「で、ここどこだ？」

「知るか。」

知ってたら苦労しないぜ。ハア……

「おおー。よーやく起きたか。」

後ろから声がかかる。女の子の声のようだ。

俺と光輝は反射的にそちらを見る。そこにはなんかゴロスリっぽい服をきた12歳〜13歳くらいの少女がいた。

「だれ？」

と光輝が訊く。

「私か、私は神だ！！！」

頭、大丈夫かコイツ。まあ、こんな真っ白いところに長いこといたらそうなるかもな。

「オオー」

って、光輝なに信じてるんだ。アホか。そうだ、こいつアホだったけ。

・・orz

「うむ。いいリアクションだ。おい！その黒髪ツンツン何かリアクションないのか!？」

どっかのフラグ乱立不幸少年と一緒にするな！ちなみに俺は御坂琴は上の嫁だと思う！美は真のヒロインだ!!!
はっ!!!熱くなってしまった。

「とりあえず、あんたが神ならここどこだかわかるか？」

「ここはねえ、うーん説明するとなると難しいなあ…一般的には天国かな。うん。」

なんか、さっきと口調が違うような気が・・・

「うん。こっちが素」

うおっ!!!俺の心を読んできた。ほんとに神なのか？

「なあ、天国ってさっき言ってなかった？」

「コウキ!!!今まで空気だったぞ!!!」

「うん、天国(?)だよ。」

待てよということとは

「俺らもう死んでる???!!!!!!」

コウキと同じこと考えてたらしい。見事にハモツた。

「うん。私が殺した(笑)」

「ハア?????!!!!!!!」

「どういうことだ!!!」

光輝が声荒げる。いや、待てよまさかこれって、

「そう。転生フラグだよ(笑)」

神（仮）のやるゝまた人の心読みやがった。

「ということは元の世界には戻れないのか？」
と光輝が聴く。

「うん。死んだ人間生き返らせると、パパに怒られちゃうからね。」
へえゝ神にも父親がいるのか。以外。

「で、異世界に転生させて何やらせるつもりだ？」

「それは、向こうで聞いて説明するのは私じゃないし。あっそうだ。
くるか「流迅だ」知ってるよ。そっちの黒髪さらさらは光輝でしょ。
んで、流迅には謝らないとね。ごめん。」

「なんだ急に。」

「君はもともと殺すつもりはなかったんだけど、光輝と一緒に巻き
込んだじゃった。大丈夫君も転生させてあげるから」

なんかやばいことになってしまった。

プロローグ2 自称神、参上!! (後書き)

すみません。すごく短いです。

そして駄文です。orz

キャラの容姿が少し出たので説明したいと思います。

真雲流迅

黒髪でツンツンにしている。パツと見かみじよ さん。でも眼光が鋭い。

神川光輝

黒髪でロン毛でさらさら。そしてイケメン。

主要キャラがそろったら設定を出したいと思っています。

プロローグ3 強化しよう!!! (前書き)

なんとか、1か月以内に投稿できました。
だんだんペースを上げていきたいです。

プロローグ3 強化しよう!!!

（流迅side）

「さあ俺は、大変なことに巻き込まれてしまった。この光輝という悪魔のせいだ…」

しかも目の前の神（仮）がなんか張り切っている。

「さて、異世界で魔王を倒してもらったために君たちをめっちゃめっちゃ強くしちゃいます!!!!!!」

俺らは異世界に転生して魔王とやらを倒さなければいけないようだ。うわ〜てんぷれ〜〜〜

「テンプレ言うな!!! そういう決まりなんだからしょうがないの。」

こいつまた心を読んできた。本当にこいつ神だったりして。

「さて、強化しますか。」

神が手を振ると神の手元と俺たちの手元にゲームのステータス表のようなものが出てきた。

そこには体力・知力・想像力・精神力・魔力の順で並んでいる。

「これなんだ？」

と光輝が疑問の声を上げる。

「これはねえ、君たちの今の力をわかりやすく示したものだよ。」

体力が身体能力の総合評価で、知力が頭の良さ全部。想像力はそのままだね。精神力もそのまま。魔力は魔法を

使うために消費するものだね。」

「魔力なんて俺たちにあるのか」と疑問に思ったので聞いてみた。

「うん、あるよ。魔力はどんな世界にもあるものなんだよ。重要な

「のはそこに気づくかどうかだね。」
なるほどな。俺たちの世界では、気付かなかつたから魔法ができなかつたんだな。

「さて、君たちの今の能力は、光輝くんは体力A・知力D・想像力B・精神力B・魔力Cだよ。」

「それで流迅くんは体力C・知力B・想像力SSS・精神力B・魔力Bだよ。君、想像力すごいね。」

「それはほめられたのだろうか。よくわからない…」

「なあ、そのことかBとかいというのはなんだ？」

と光輝が聞く。

「あちゃ〜説明してなかつたね。これはね、下からE・D・C・B・A・S・SS・SSSのようにその能力の大きさに応じてランク分けしているんだよ。わかりやすいじゃん。ちなみに平均がCだよ。」

「つてことは俺の想像力はめちゃくちゃすごいじゃん。まじかよ(000)」

「ふ〜ん。なるほど。」

光輝お前がそういうことというのは合わん!!!

「それじゃ、強化します。ちなみに想像力は強化できないからね。」

とそういうことで、えい!!!

神の手が光る。そうすると、なんだか体が軽くなったような感じがした。

「というかもものすごいパワーがあふれるような感じだ。」

「光輝くんは体力SSS・知力S・精神力SS・魔力Sになったよ。」

「流迅くんは体力S・知力SSS・精神力SS・魔力SSSになったよ。」

ピロピロリンー！こっきとりゅうじんはチートになった

「なんかすごいな。」

と光輝がつぶやく。全く同感だ。

「確かにそうだな。」

「まだ強化は終わってないよ。君たちに「スキル」をあげるよ。「スキル」っていうのは、それまでの経験や特技などが記されているものだよ。それがあると結構強くなったりするんだ。ちなみに今までの「スキル」も完璧に習得

した状況にするし、今からあげる「スキル」も同じように完璧に習得した状況であげるよ。」

なんかもつとチートになってゆく。

「まあこれは個人情報だし、別々にしよう。」

「さっきの能力はどうなんだ。」

「気にしない、気にしない。」

くっ、さらりと返された。

「じゃあ、光輝くんこの部屋で強化しよう。」

神が指差した方に扉があり、そこが部屋になっているのだろう。

「わかった。ところで、リュウメガネどうした？」

ハッ。何か足りないと思ったら、メガネがない…orz

駄目だ、メガネがないと、力が出ない…

「光輝く〜ん早く〜」

「はい。んじゃ。行ってくるぜ。」

そんなことよりもメガネがないのが俺の中では重要だった。

プロローグ3 強化しよう!!! (後書き)

読んでいただきありがとうございます。
駄文で申し訳ないです。

プロローグ4 スキルの説明と神獣（光輝編）（前書き）

かなり投稿が遅れました。

すみません。

まだ、がんばっていきます。

プロローグ4 スキルの説明と神獣（光輝編）

（光輝 side）

うおー！初めての流迅以外の視点だー！リュウのやつ、メガネがなくて相当落ち込んでるな…

あいつ、頼りになるけど、メガネがなくなるとなんか知らんが元気になるんだよなあ。まあ、冷静な判断は変わらずできてるから、問題ないけどさ。

「光輝くん早く〜。」

あ・・・やべえ神様待たせてしまった。

「わかった。今行く。」

えへへ〜なんかクールキャラっぽいだろ〜。でも、リュウのまえではこうはいかないんだよな〜

俺は神様に言われるまま、部屋に入った。

その部屋にはガラス？できた机と椅子があつた。

「ここに座つて。」

神様に言われた通りに座る。

「君が持っているスキルは、『剣術』と『格闘術』だよ。戦いにメインになるのはこれらだね。まあまだあるけどあまり関係ないから大丈夫だよ」

『剣術』と『格闘術』か。なるほど、俺は剣道を習っていたし、格闘はほとんどケンカで覚えた。あとのスキルが気になるけど関係ないならいいや。

「で、君にあげるスキルは、『勇者』・『見切り』・『氣』だよ。」

君が覚えていた、『剣術』・『格闘術』と私があげたスキルは完全習得状態にしておくからね」

「それはわかったし、ありがたい。けど、『勇者』と『見切り』と『氣』ってどんなスキルなんだ？」

「今から説明するから、あせらないですよ。」

と神様は頬をふくらました。うん。なんか、かわいい。

・・・ハッ！！俺はロリコンじゃない！たぶん・・・い、いや、絶対！！

(君の変な考えダダ漏れなんだけど・・・)

と思っっている神様がいたとかいなかったとか・・・

「そ、それじゃ説明するね。『勇者』のスキルは幸運になったり、仲間ができやすくなったり、固有の技が使えるようになるよ。あと魔法もつかえるようになるよ。」

次に『見切り』は自分の動体視力が上がって、敵の攻撃がよけやすくなるよ。それと相手が使った剣技や格闘技を見ることができれば、コピーできるよ。でも、見ることができなければ、意味ないけどね。」

最後に『氣』のスキルは説明が大変だけど、氣っていうのは体内にある魔力とは別のエネルギーで、主に身体能力を上げたり、剣の硬さや鋭さを上げることができるよ。まあ、これでスキルの説明を終わるよ。」

長かったけどなんとなくわかったな。向こうでたぶん覚えられるだろ。」

「もう、戻ってもいいか。」

「まだだよ。」

と神様は言っつて、後ろを指差した。そこには、大量の指輪が棚に並んでいた。

「ここから、一つ選んで。あげるよ。」

と言われたので、そこから選ぶ。なにか一瞬キラツと光った指輪があった。なんだか俺を読んでいる気がする。それを手に取った。その指輪は、ライオンとトラが合体したような獣が描かれた指輪だった。

「つけてみて」

と神様が言う。言われた通り、右手の中指につけてみた。瞬間、視界がゆがんだ。

~~~~~

気が付いたら俺は、俺の通っていた中学校の屋上にいた。

「なんで、こんなところにいるんだ？」

「ふむ。そなたが我の主となる者か。」

と後ろから声がかかる。

「誰だ！！」

と後ろを振りむくとそこには金髪のツンツン頭の少年がいた。歳は俺と変わらないくらいだよつだ。

なんとなく野性的な感じがするなあ。

「我は神より、身につけし者の力と作りだされた神獣だ。わかりやすく言えば、そなたのつけた指輪に宿っていたものだ。」

とりあえずこの少年は俺がつけた指輪に宿っていた神獣らしい。

「我はそなたと契約することで力を発揮することができる。また、そなたが神からもらったスキルも解放され使えるようになる。」

「そうなのか」

力があった方がいいはずだ。俺たちは異世界に行つて魔王を倒すらしいのだから。

「よし、契約するぞ。ところで何をしたらいいんだ？」

「簡単なことだ。両手を前にだせ。」

俺は言われた通りに両手を前に出した。神獣はそれに同じく両手をだし、手と手が合わさるようになった。

なにかが流れてきて出ていく感じがする。

2、3分そうやっていたが、神獣が手を離れた。

「これで契約完了だ。」

「えっ。呪文みたいのはないの？」

「我ら神獣には必要ない。ところで、我に名前を付けてくれないか？」

「お前名前なかったのか。いいぜ。」

なんかパツと浮かんだったのでその名前にする。

「じゃあ、お前の名前はライだ。」

「ライだな。ありがとう。」

なんかライがうれしそうだ。

「これからよろしく、ライ。」

と俺は右手を出した。

「うむ。こちらこそよろしく頼む、我が主。」



「まあな。」  
リュウがどんな反応するか楽しみだ。

「じゃあ神獣を呼んでみて。名前を呼ぶだけでいいよ。」  
「了解。ライ！出てこい！！」

指輪が光ると同時に、

「うむ。呼んだか光輝殿。」  
の声とともに、小さい金のトラとライオンが合わさったような獣が出てきた。大きさはこのくらい。

え？わからない？いいの。いいの。たぶんリュウが説明するから。

「じゃ、流迅くんの居るところに戻ろう。」  
の神の声とともに俺は新しい仲間とともにこの部屋を後にした。



プロローグ4 スキルの説明と神獣（流迅編）（前書き）

今回は長いです。

## プロローグ4 スキルの説明と神獣（流迅編）

（流迅 side）

ああ、メガネ俺の赤フレームのメガネが消えている。俺の相棒そして戦友そしてトレードマーク。俺は小学3年からメガネをかけてるけど、そのころから俺のメガネは必ず赤があるようにした。あれがないと元気が出ない。

でも、何故かここでは、メガネかけているのと同じように見えてい  
るから問題ないけど。

「戻ってきたぜー!!」

光輝<sup>はか</sup>が帰ってきた。

「おう。なっ!!!!!!!!!! シャ だと?! どうして?!」

「それはいい!!」

「しかも逆シ アバージョンだと!!」

「難民による政治を作るためry」だまれ!!」どす!!」ぐぎや  
!!」

「メインカメラが死んだ・・・」

この野郎完璧にシヤ になりきってやがる。イケメンが金髪になっ  
てしかも、ガチであるの彗星に似ていて、ものまねまでしゃがった。  
つい殴ってしまった俺は悪くない。

「ひで〜な、リュウ。あつ。そうだ。こいつはライ。俺の新しい相  
棒だ。」

と光輝は自分の肩にいる獣を指差す。

「神獣のライだ。よろしく頼む。」

「おう、よろしく。あいつ馬鹿だから色々サポートしてやってくれ。

「ツンツン早く〜。」

と神が言う。

「了解。今、行くよ。」

と俺は答えた。

「なんか俺と話している時と、雰囲気が違う気がする。」

（まさか、神にまで、フラグを立てたのか。いや、それはない・・・たぶん。）

「たぶん気のせいだ。んじゃ、光輝。行ってくるぜ。」

俺は色々不安を抱えながら、神の居る部屋に入った。

そこには、水晶かなにかすごい神聖なもので、作られたような机と椅子があり、正面には指輪がたくさん並んでいる棚があった。なるほど、光輝はあそこから神獣を選んだのか。

「すごいね。君の場合こつちが説明する前にわかるんだね。まあこつちは楽でいいけど。それじゃあ座って。」

言われた通りに座る。心を読まれるのに微妙になれた俺がいる。

「まず、質問なんだが、いいか？」

「別にいいよ。でも、スキルとかのことはちゃんと説明するよ。」

「いや、その事じゃない。お前、光輝に惚れたのか？」

大体、惚れている場合は、顔を真っ赤にして否定するが、追及されると白状する。惚れてないが線ありの場合は少しあわてて否定する。俺はこの質問をして、線なしだったことが一度もない。

「うっん。別に。」

神は俺がはじめてみるリアクションをした。まさか、完璧に表情を変えずに否定するとは・・・学校一の無表情と呼ばれるやつでも、微妙に顔が赤くなっていたのに・・・

「だって、アイツ私のことを小さい子扱いするんだもん。私は何万年も生きているのに。だから、多少の怒りを込めて口調を変えてた

の。」

ああ、なるほどそつちか！アイツ人の感情の変化を読み取る能力に欠けてるからな。うん。殺気とかなら敏感なのにな。

「それじゃあ、気を取り直して、君の持っているスキルについて説明するよ。」

君が持っているスキルは、『格闘術』・『反則格闘術』・『瞬間記憶能力2』・『速読』・『瞬時理解・応用』だよ。まあ君があつちの世界でよく使うのはそれらだね。つてか『反則格闘術』とかほぼオリジナルじゃん。すごいね。」

「なあ、スキルがなくても剣は扱えるだろ？じゃあスキルつて何なんだ？」

「スキルというのは才能のことだよ。つまり、プロの選手はそのスポーツのスキルがある。幼いころからやっているスキルが発生こともあるよ。また、なにかのスキルから派生したものもある。たとえば、君の『反則格闘術』とかね。でも『瞬間記憶能力』などは才能ではなくそのまま使えて発生する能力だよ。君の『瞬間記憶能力2』は意識したものを記憶できるよ。」

「なるほど」

俺はガキの頃からじーさん空手とか習っていた。でも、俺は日々の筋トレとかがいやで、体力はなかつたんだよな。とある事情で喧嘩を小4からやらなければならぬ状況だったからな。俺は力がない。あるのは瞬発力だけ。でも、それはガキの喧嘩には余り役にたたない。ガキの喧嘩に大事なものは、数とパワーだけだ。俺は技術でパワーをカバーした。でも、数の暴力にはかなわなかった。どうしても、一発で決めなければ、奴らは恐怖を覚えれない。つまり、一発で決めなければ一対多数の状況をうまく使ってくるということだ。そのせいで、何回負けたことか。けど、小6になって一発で相手を気絶さ

せる技を身に付けた。そう、それが格闘技や暗黙の了解でほとんど攻撃しないと思われるところだけを狙う反則格闘術だ。まあ、気絶だけで外傷をほとんど残さないようにするのが大変だっただけで、小5のころには一応完成してただけだな。

あと俺はほとんど勉強してないのに、テストでの成績はいい。なぜかは、スキルがあつたからなんだな。

「さて君にあげるスキルを説明するよ。いいかな。」  
「OK大丈夫だ。」

「君にあげるスキルは『賢者』『神眼』『魔法創造』の3つだよ。

『賢者』のスキルは魔法を使うときの魔力の消費を少なくしたり、マルチタスク平行思考ができるようになるよ。また、他人が使った魔法を解析することができるよ。

『神眼』のスキルは魔眼と呼ばれるたぐいのものをすべて使えるようになるスキルだよ。でも、副作用までは消せないからその辺はあつちの世界で調べるといいよ。

『魔法創造』は自分で魔法を作ることができるよ。でも、向こうで知ると思っけど、自分の魔法属性にあつたものじゃないと新しいものは作れないから注意してね。これでスキルの説明を終わるよ。」

「ここでは俺の魔法属性とやらを覚えてくれないのか？」

「時間がないんだよ。人間をここに存在させるのは色々制約があつて、ここでは君たちに力を与える時間とスキルを与える時間と神獣と契約させる時間しかないんだ。」

「なるほど。なら、しょうがないな。」

確かにここが神限定の場所なら、ただの人間である俺たちをここに存在させるのは難しいということか。

「そろそろ、後ろの指輪を選んでもらわないと。」

「わかった。」

俺は棚に並んでいる指輪を見た。その中に一つだけ俺を呼んでいるようなのがあった。それを手に取る。龍の顔が彫られた指輪だ。

「これだ。」

「じゃあつけてみて。」

言われた通りつけてみた。その瞬間世界が歪みそして世界が変わった。

~~~~~

「ここは・・・」

俺はあたりを見回す。間違いない。ここは俺の隠れ家だった廃工場だ。

「なぜ俺はここにいるんだ？」

「それはそなたの心の中だからであろう。そなたの一番大事な場所らしいのう。」

声のした方に振り向くとそこには、銀の髪を肩まで伸ばした少女がドラム缶の上に座っていた。瞳も髪と同じ色で水色のワンピースを着ている。歳は17〜18歳くらいだろうか。

「この場所がほかのやつに知られたのはこれで、2人目か。」

「妾はそなたのつけた、指輪に宿る神獣だからのう。一人目はそなたの親友か？」

「いや、違う。ってかアイツに教えたら、アイツだけじゃ収まらないくなる。」

光輝のファンクラブに絶対にばれる。これだけは確実に言える。

「では、そなたの恋人かの？」
「恋人ではないな。確かに異性だが、そんなものではなかった。つてそんなことより、俺とお前は契約をするんだろ。何をしたらいいんだ？」
「ふむそれは・・・／／」
「それは？」

なんか神獣の少女の顔が赤いぞどうしたんだ？

「せ、接吻じゃ／／」
「へ、・・・ええええー！！！！接吻つてあの接吻か?!」
「そうじゃ。とういうよりあれ以外の接吻は知らん／／」
「口づけか？」
「そうじゃ／／」
「k i s s か？」
「なぜに英語？そうじゃ／／」

お、落ち着けおら、じゃなくて俺。ファーストキスじゃないんだ落ち着け。

「よし！！やるしかないならやろう。」
「う、うむ／／」
チユ 俺の唇と神獣の少女の唇が触れあった。
「こ、これでいいのか？／／」
「う、うむ／／うまく契約できたようじゃ。」

絶対俺の顔赤いよ。だって向ここの顔も赤いもん。

「あつ！！そういえば、光輝の神獣はオスだったけど、もしかしてキスしているのか？」

「いや、同性同士ならキスではなく手を合わせ、魔力の入れ替えで

契約を行う。」

「え？じゃあ、俺たちキスする必要なかったんじゃ。」

「いや、異性の場合には必ずキスではなくては、駄目なのじゃ。なぜと言われてもそういふ決まりだからしょうがないの。」

話題を変えたのでなんとか、顔のほてりがおさまってきた。

「そういえば、お前の名前はなんだ？」

「それがの名前がないのじゃ。契約者につけてもらわねばならぬらしい。」

「じゃあ、お前の名前は、ピナだ。」

「なんだか簡単な名前だの。じゃがいい名だありがとう。」

「どういたしまして。」

「さて、これで契約は終わりじゃ。主の髪を銀色にできるがするかの？」

銀髪かでもな〜

「いや黒のままでもいい。」

「そうか。妾の力が必要なときはいつでも妾の名を呼ぶがいい。それでは元の場所に戻るぞ。」

「了解した。」

俺の視界が歪んでいく。来た時と同じだ。瞬間世界が変わった。

~~~~~

俺はいつの間にか水晶の椅子に座っていた。

「終わったみたいだね。君は髪の色変えなかったんだ。」

「まあな。別に人の自由だろ。」

「そうだね。そういえば、君に渡さなくちゃいけないものがあるんだ。はい、これ。」



俺はケースに入ったそれを見た。それは間違いなく俺の赤ぶちのメガネだった。

「うおおおおおお!!!きたあー!!!」

神は俺の喜びように若干ひいている。だが、気にしないメガネはいものなのだから。ついでにグラスンでもいい!!

「そのメガネは君の『神眼』のスキルが暴発しないようにするリミッターだよ。ついでに君の『賢者』スキルで術式を解読できるようになっているから複製もできるよ。」

「ありがとう!!」

「じゃあ時間も押してるし元の部屋に戻ろうか。」

俺は喜びに満ちながら部屋を後にした。

プロローグ4 スキルの説明と神獣（流迅編）（後書き）

ピナの名前の元ネタわかる人はわかると思いますがあれです。

S Oのシ カの龍の名前です。

わからない人は戯言と思ってスルーしてください。

## プロローグ5 異世界に旅立つ(前書き)

今回は短いですが、でも、いつもより早く投稿できました。

やっとこれでプロローグは終わりです。

## プロローグ5 異世界に旅立つ

（流迅side）

俺は光輝の待つ部屋に戻った。

「おお、リュウ、メガネが戻ってるじゃん」

「まあな」

と答えると光輝は少し間をおいて、

「お前・・・なんで髪の色変えなかったんだー!!」  
と叫んできた。

「うるせー人の自由だ」

「ああ、はいはい、そこまで」

神が止めてきたので

「ああ、なんだ」

と息ひつたり俺たちは返事をした。なんでかぶるんだ・・・はあ。

「そろそろ、時間がないからね。異世界に行ってもらおうよ」

確か、あの部屋でもそんなこと言っていたな。

「了解した」

と俺は返事をした。光輝はいつでもいいぞという表情をしている。

（ふむ、妾の事を主の親友に紹介する時間もないのか。）

うおー!なんだ。頭の中に声が響いている。この声はピナか。

（驚きながらも表情には出さないか。なかなかやりおるの。まあこのように妾と主はいつでも念話ができるぞ。主も念じればできるはずじゃ）

（こんな感じか？）

（うむ。そろそろ念話を切るぞ）

とってピナは念話を切ってしまった。

「どうした。リュウ急にぼうっとして」

「いや、お前の神獣はどこに行ったのかと思って」

「ん。指輪に帰って行った。まあ、あいつとは繋がっているから大丈夫だぜ」

「さて、こっちの準備も終わったから、向こうに行ってもらおうよ。まずは光輝くんから行ってもらいます」

「あれ、俺から？二人同時じゃないのか？」

と光輝が疑問の声を上げる。

「二人同時は初めてだからやりたくないな。もしも、失敗したら大変だし」

まあ、それはそうだろう。二人同時は初めてらしいし。失敗したら笑い事じゃない。

「そうか、わかった。じゃあ頼む」

「うん。じゃあいつてらっしやい」

光輝の体に光が包む。だんだん光輝の体が透けて消えてゆく。

「それじゃあ、リュウ。先に行ってるぜ！！」

光輝は俺に右手の親指を立てながら言った。ったく、旅行に行くわけじゃないんだから。調子狂うぜ。

「おう、待ってる。すぐ行くと思う」

と俺も親指を立てて言う。こういうのはノリが大切なんだ。

光輝の体が完全に消えた。ふむ、行ったのか。

「次は俺だろ。早くしてくれ」

「その事なんだけど、君に頼まなければならぬことがあるんだ」

「頼みってか命令だろ。この状況じゃそう感じるだ」

「まあ、そうなるけどね」

「まあ。どんな命令であれやるけどな」

「そうだ、こいつには借りがある。元を正せば俺を間違えて殺した神のせいだが、間違えたんだしたらそのまま殺しておくのも選択肢の一つだったはずだ。それを俺に力を与えて転生させるといつ時点で俺にとっては借りだ。ほかのやつはなんていうか知らないが、俺にとっては充分だ。」

「そう、ありがとう」

「ふん、さっさと説明しろ。時間がないんだろ」

数分後、神の頼みの内容を聞いた後俺も光に包まれていった。

「じゃあな。言われたことはしっかりやってやるよ。神の仕事がんばれよ」

そして俺は消えた。

〈side out〉

流迅が消えた後の神の部屋で神は一人(?)つぶやいた。

「がんばらなきゃいけないのは君だよ。流迅くん。君は異端者イレギュラーなのだから」

「そう、なぜ神は流迅を巻き込んでしまったのか。それは彼の行動が神にも予想できなかったためである。」

神の雷は地上に届くまで5秒かかる。なぜなら世界を越えての干渉はとても大変だからだ。よって神は5秒後の未来を覗いて雷を放つのだが、流迅が干渉する未来ではそれを見ることができなかったのだ。つまり、異端者イレギュラーとは、未来の予測ができない人のことである。

それがどういうことなのか神にしかわからないことである。

〈第三者side〉

木々が生い茂った双丘の上二人の少女が石板に魔力を注いでいた。石板は魔法陣のようだ。

すると片方の魔法陣が輝きだした。その輝きはまるで光の柱のようだった。

〈side out〉

「????side」

私は魔法を使った後死ぬ。あちらの召喚魔法陣が輝いている。今回は勇者なんだ。と私は他人事のように思いながら、こちらの召喚魔法陣に魔力を込める。というか持ってかれている。

召喚魔法陣：それは二つの丘の上にある。おっば 丘など他の国から言われているそうだが、この国では召喚の双丘と呼んでいる。二つの丘その上にそれぞれ魔法陣があり、片方は勇者、片方は賢者を呼ぶためのものとされている。

しかし、二つ同時に起動させなければ、召喚はできず、しかも片方の召喚が成功するともう片方の術者は魔力切れで死んでしまうという代物だ。また、起動させるには魔力適合が必要であり、適合者ではないものは扱えないという点が得に扱いづらいものだとわかる。その適合者は必ず王族に現れ、しかもその適合率が高い。私はたまたま適合者だったのだがただの平民だ。それに適合率も低い。適合率が高ければ、召喚できる可能性は高い。

つまり、私は死ぬ。

でも、死ぬことに後悔はないかな。だって孤児だった私をここまで

盛りたててくださったこの国のためだもの。他の孤児に比べておいしいものを食べて、屋根の下で眠れて、今、向こうで召喚魔法を使っている王女様という親友もできて、こんなに幸せで幸運はない。

だが、少女の幸運はここで終わらない。なぜなら、少女が魔力を注いでいる魔法陣もまた輝きだしたからだ。

「えっ!?!」

うそ、こんなあり得ない。二つの魔法陣がほぼ同時に輝きだすということは術者二人の魔力が同調したということ。でも、前例はなかった。

そんなことを思っている間に光の中からだんだん人の形が浮かび上がってくる。

向こうの光はだんだん消え、こちらもだんだん消え始めた。

そして、光の収まった場所には黒の服に黒い髪そして黒い眼をしたメガネをかけた少年が立っていた。

少女はつぶやく

「ありえない・・・」

その少年はそのつぶやきに答えるようにこう言った。

「あり得ないなんてことはあり得ないんだぜ」

その少年は不敵な笑顔を浮かべていた。

side out



## プロローグ5 異世界に旅立つ(後書き)

ここはあとがき・・・

作者の遊びが集まる場所。

流迅(この先流)「おい、何かっこうつけてんだよ」

光輝(この先光)「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄!!」

怒涛号(この先怒)「別にいいじゃん。遊んでみたくなっただもん」

流「ヘッどうせ他の作者様もやっているからやりたくなっただけだろ」

怒「ギクツ!!」

光「ふーん、そうなんだ。でもたぶん毎回あるとは限らないよね。

それにただの次回予告だし」

怒「ギクギクツ!!」でも、まあそんなことは置いて、次回から本編に入りませう」

流「軽く流したな作者。まあいい。俺が神に言われた頼まれごととは？また、???は誰なのか」

光「俺はどうなっているのか!？」

怒「次回、第一話 巫女と勇者と賢者と神!? 乞うご期待」

流「更新は遅れると思うぜ。だってこいつ駄作者だもん」

怒「最後にそれは余分だー!!」

**第1話 巫女(王女)と勇者と賢者と神?! (前書き)**

少し、予告とタイトル変えました。

やっと第1話です。また今回は説明ばかりです。それではお楽しみください。

## 第1話 巫女（王女）と勇者と賢者と神？！

（流迅side）

俺は光に包まれた後、岩畳のようなところに立っていた。よかった、空から落ちなくて。

などと馬鹿なことを考えていると結構綺麗な少女が啞然としてこちらを見ている。

少女は緑色の髪の毛を肩まで伸ばしている。歳は16〜17くらいだ。巫女服のような服を着ている。なんとなく西洋的な感じだ。また、その上に軽鎧をしている。何故か服といい感じにあっている。腰には2本の剣を装備している。

ふうむ、この娘は巫女で剣士なのだろう。

そんなことを考えているとその少女がこう言った。

「ありえない」

俺はそれに答えるように某強欲のホムンクルスの口癖を言いはなつた。

「あり得ないなんてことはあり得ないんだぜ」

「で、でもだつて」

それでもこの少女は戸惑っている様子なので俺はさらにこう言った。

「現に俺はここにいるし、あんただつて存在している。夢だと思つたら自分の頬をつねってみな。痛いはずだから。それにあんたは誰かを召喚するつもりでこの魔法陣？を発動させたんだろ？」

その少女は自分の頬をつねっているようだ。うーむ。ずいぶん素直な子だ。

「い、痛い。えっ、じゃあ夢じゃない？私、生きているの・・・」

すると、その少女の体が急にふらふらし始めた。

「っ。まずい！！」

俺は急いでその少女を抱きとめた。気を失ったようだ。

「あっそういえば、名前聞いてなかった」

つたく、神は面倒いこと頼んでくるし、光輝はここにいないし、名前聞きそびれるし。はあなんだかな。

光輝何してんのかな。まあ光輝のことだから女の子としゃべっているんだろうけど。

〈side out〉

〈光輝side〉

異世界に召喚された俺の前には女の子がいた。髪の毛は青色目も同じ色をしている。巫女服の上にローブを着ていて、青い宝石がついた杖を持っている。たぶん、魔法使いなんだと思う。

「あなたが勇者様ですね。私はプレセリア王国第3王女であり、第1巫女リスティーナ・プレセリアです。気軽にリスティと読んでください。」

王女と来たか、なんかRPGの定番だな。

「俺は神川光輝だ。こっち風で言うと光輝神川だ。名前で呼んでく

れるとうれしい。」

「では、光輝様現状の説明をさせていただきます。」

「ちよっと待ってくれ。その光輝様っていうのはやめてもらえないか。そっちは一国の王女だろう。それに敬語で話さなくてもいい。」  
「そっだ、俺はただの高校生だったんだ。変に気を使われると調子が狂う。」

「わかったわ。こんな感じでいいかしら。まず、この世界はエターナルと呼ばれているわ。そしてここは、エターナル最大の大陸であるピークアルト大陸の南に位置する国勇者と賢者の国プレセリアよ」  
「リステイは神妙な面持ちで説明し始めた。」

「なぜ、この国が勇者と賢者の国と呼ばれているかというところ……」

説明によると

この国は異世界から勇者や賢者を召喚するためそのような名で呼ばれていること。

ここの召喚魔法陣は勇者を召喚するための魔法陣だということ。

逆に向こうは賢者を召喚するための魔法陣だということ。

ピークアルト大陸の東に位置する、ポティア大陸で魔王が現れたこと。

その魔王を倒してほしいということ。

その魔王はまだその大陸を支配していないが時間の問題だということ。

すでにピークアルト大陸でも被害が出ているということ。

「なるほど。ところでなぜ俺はこの言葉を話せているんだ？俺は異世界の人間だ。話している言葉は違うはずだ」

「あなたを召喚した魔法陣には言語をこちらに合わせる魔法も含ま

れているのよ。これでここで説明できることはしたわ。この丘を降りましょう」

光輝は少しあわてながら抗議した。

「ちよつと待つてくれ。あと一人俺と一緒に召喚されたはずの友人がいるんだ。そいつを待つことはできないか？」

「たぶんその方なら、向こうの丘の召喚陣で召喚されているはずよ。向こうの丘にも私と同じ巫女がいるし、大丈夫だと思うわ。それにその子と丘の下の広場で待ち合わせをしているから大丈夫なはずよ」  
「わかった」

リステイは立ち上がり歩き出そうとしたが足元がふらついている。急いで光輝が支える。

「おい、大丈夫かよ。結構ふらふらじゃねえか。ほら、おぶってつてやるよ」

光輝はリステイをおんぶし、丘を降り始めた。そのときリステイの頬が赤くなっているのに気が付かぬまま。

〈side out〉

〈流迅 side〉

少女はこの後、数分後に起きて慌てながら説明を始めた。どんなことかかって？光輝のやつを見る。書いてあるから。それと同じだよ。

「・・・以上がここで話してできることのすべてです。何か質問はありますか」

「あーまず、あなたの名前は？俺は真雲流迅。こつち風で言うつと流迅真雲だ」

「あ、ごめんなさい。私はプレセリア王国第2巫女アリサ・ウイスティンです」

アリサは顔を真っ赤にして答えた。うん。そりゃ自己紹介を忘れち

や恥ずかしいわな。

俺は少し真剣な表情をして一番気になったことを聞く。

「んじゃ、アリサ。お前はなんで俺が召喚されたときあんなに困惑していたんだ？それにお前が気絶している時の表情は安堵の表情だった。どういうことだ」

「ええつと、その。この話を聞いてもこの国のことを嫌いにならないでください」  
と前置きして話し出した。

「実はこの召喚魔法陣は向こうの丘の魔法陣とリンクしていて、二つの場所で同時に魔力を流すことで二人の魔力の和ではなく、二人の魔力の積に値する量の魔力を生み出すことができるようになってるんです。ですがこの魔法陣には欠陥があつてそれぞれに魔力が適合しないと発動できず、さらに魔力の少ない、または適合率が低い方の命を奪うようになってるんです」

「なるほどな。だから自分が生きていたことに驚いたのか」

「はい。ですが心当たりはあるんです。向こうの巫女のリストイーナ・プレセリア様のスキル『同調』のおかげだと思います。このスキルは魔力を同調させ、片方が2乗の魔力を生み出します。また、適合率も同調させていると思います」

「どこのツインドライブだよ。と心のなかで突っ込みつつ、さらにできた疑問をぶつける。」

「魔力量はどうなるんだ。たとえば多くの魔力を注いだとしても魔力量に違いがあれば、片方が死んでしまうのではないのか？」

「えつと、それは私のスキル『魔力圧縮貯蔵』が影響していると思います。私は常に魔力を圧縮して体内にためています。ですから魔力量が少なく見えるんです。それを解放すると通常の3倍の魔力量が得られるんです。通常の状態での私の魔力量はリストイーナ様

のちょうど3分の1だったんです。それでほぼぴったりになったんだと思います」

どこのトランザムだよー！ー！ー！ー！ー！と心の中で絶叫した。

「なるほどな。んで、ぶつつけ本番だったから生きているのに驚いたと」

「はい、そろそろこの丘を降りましょう。下の広場でリステイナー様が待っているはずですよ」

アリサと流迅は歩き出そうとしたが、

( 待て、主！！向こうの林の方向から殺気が4つ来る！！ )

( 何だと！！アリサはふらふらだし、逃げるのは無理か…戦うしかないな )

( 妾も戦った方がよいのか？ )

( いや、いい。俺の力を確かめてみる。もしもピンチになったら頼むよ )

( ふむ。わかったぞ )

「待て、アリサ。向こうの林から何か来る！！」

と俺はアリサを止めた。

「うそ…私は戦えない。流迅様逃げてください！！」

「いや、そんな暇はなさそうだよ…」

林から4人の武器を持った男たちが現れた。アリサは戦えない。おぶって逃げるといふ手もあるがあいつらが許してくれるとは思われない。男たちの武器はそれぞれ斧、両刃の剣、曲剣、ナイフ2刀つて感じた。まあ、4人くらいだったら俺1人でも何とかかなりそうだ。ふん。神の頼みごとが思った以上に早く終わりそうだ。

〈回想〉



「それじゃ、説明するね」

光輝が異世界に行った後、俺は神に頼みごとをされていた。

「君に頼みたいのは、君が召喚されたときにいるはずの少女を1日守ってほしいんだよ」

「なんだ、そんなことか。問題ない。いいぞ」

少女を1人1日守ることぐらいたやすい仕事だ。

「うん、ありがとう。言っておくけど、その子死んだら君も死ぬから。ってか私がまた殺すから」

「ハア!？」

「転生者には1人につき1人のその世界の案内役になる子が必要なんだけど、その子今日死ぬ運命だったからそれも変えなきゃなんないから。たぶん、それを变えるのに1日ぐらいかかると思う。だからその間守らなきゃ君を転生させられないってことになって君を殺さないといけなくなるんだ」

なるほど。待てその子が今日死ぬ運命って、どういう…あ!!わかった。わかってしまった。ちっ胸糞悪りイ。光輝に聞かせなかつたのはそういうことが。

「あーあ、ばれちゃった。君って頭いいんだね」

「つまり、あれだろ。等価交換のことだろ。1人転生する代わりに向こうでは1人の命を必要とするんだろ。それは今回の場合はその子だったが、俺が転生するにあたってその子に優先すべき割り当てができた。それで別の命が2つまたは俺らを殺すかのどちらかになるってことだろ」

「その通り。向こうでは奇跡かスキルのおかげになっているはずだけどね。それが神にもどうすることのできない世界の補正力。それに正確には今回向こうの世界が払う代償は3つの命と異世界召喚術式だよ。まあ少女を丸1日守る必要はないよ。間接的でも3人以上

の人間を殺せば問題ないから」

なるほどな。俺とその少女と光輝か。そして、人殺しの依頼か。面倒だがやるしかないだろう。それに向こうでは命の奪い合いに絶対に巻き込まれるだろうから奪う方に早めに慣れて置くにもちょうどいい。

「そついつことなら早く言え。そっちの方がわかりやすい」

「さて、そろそろ時間だね。行ってもらうよ」

「じゃあな。言われたことはちゃんとやってやるよ。神の仕事がんばれよ」

〈回想 end〉

俺は神からの頼み事を思い出し、そして臨戦態勢に入った。こいつらを倒して俺が生き残るために。

〈side out〉

第1話 巫女（王女）と勇者と賢者と神?! （後書き）

ここはあとがき・・・

作者の遊びが集まる場所

流「おい、作者!! なんて投稿がこんなに遅いんだよ」

怒「こつちも大変だったんだよ!! 文化祭とかテストとかテストとかレポートと か!!」

光「あと、作者のタイプ速度が驚くほど遅いのもあるよね」

怒「それは言っではいけないお約束...」

ライ「それよりもなぜ我の出番がないのだ?」

ピナ「妾の出番も少ないし...」

流「そういえばそうだな」

怒「大丈夫、大丈夫。とくにピナはこれから結構活躍してもらうつもりだし、ライも活躍してもらうから。この後出番がほとん

どない神と違ってね」

神「ど、どういうことだー作者ー!」

ピナ・ライ「なら、よし!!」

光「さつていった...」

神「私の出番がないとはどういうことだ? おい作者!! 作者ー!」

怒「まれにちよつとした用事で出てくるくらいだよwww」

神「もう許さん...」

怒「ちよ、待て。お前は創造主たる俺に逆らうのか」

神「うるさい!! 神の雷!!」

ピシャ、ドゴーン!!!!!!

怒「ギャー!!!!!!」

流「えつと作者がなんかやばい状況のため、次回予告は俺がやりま

す。  
ついに初戦闘!! 流迅の実力は!?

光輝たちと無事に合流できるのか!?

次回、『流迅の力。そして合流』

その力まさに反則。お楽しみに!!」

怒「ぜ・・・ひ・・・見て・・・くだ・・・さい・・・ガクッ」

神「ふふふふ。はーはっはっは」

## 第2話 流迅の力そして合流（前書き）

投稿が遅れてすみません。

初の戦闘シーンがあります。うまく書けているか自信がありませんがどうか楽しんでください。

それとできれば感想ください。

お願いしますm(\_\_\_\_\_)m

## 第2話 流迅の力そして合流

「流迅 side」

さて、俺の目の前には4人のいかにも柄の悪い4人の男どもがいる。両刃の剣を持った小太りな男が下品な笑みを浮かべながら、しゃべりかけてきた。

「おい、あんちゃん。その女を置いていってくれたら、命だけは助けてやるぜ」

俺が黙っているとなんと思ったのかアリサが俺の前に出て俺をかばうように立ちしゃべりかけてきた。

「（私が時間を稼ぎますからその間逃げてください）」  
気に食わねえ。俺はそれを無視した。

「おい、どうせ俺が逃げようとしたところで後ろから殺すつもりなんだろ。あと、アリサ下がってるのはお前だ。たく…ふらふらのくせして格好つけやがって…下がってる」

俺はアリサの肩をつかみ後ろに強引に退かせた。

「え？流迅様！！」  
「たく俺は戦う力を持ってんだ。女ひとり守れなかったあの頃とは違う。気に食わねえ。こんな屑どもに挑発されるのも女に庇われるのも。」

俺はアリサの方を向き優しくこう言った。

「いいから、下がってる。こんな屑どもにはやられねえし負けねえよ」

「へへへ、馬鹿だぜ。コイツ女を前に格好つけやがった」

とナイフを持った痩せ形の男が曲剣を持った目つきの悪い男に言った。

俺は下品な男どもの方を向き、左手の中指と人差し指でメガネをずりあげた。

その指を男どもに突きつけ、

「おい、屑ども。貴様らの罪…今、ここで罰に代わる…覚悟はいいな!!」

いつもの決め台詞を放った。

「さつきから聞いてれば、調子こいてんじゃねー!!」

と斧を持った大男が斧を振りかぶり、襲いかかってきた。

俺は左半身になりながら左斜め前に移動しつつ振り下ろされた斧をよけ、さらに斧を持った右手が伸びきるか伸び切らないかぎりぎりのところでやつのはじめに左手の掌で支え、右手で奴の腕を上から思いつきり押した。ゴギツという音が鳴る。俺はそれを聞くか聞かないかのところすでに奴の左後ろに立ち、右手でひじ打ちを後頭部に打ち込んだ。

ドガツ!!

鈍い音が鳴る。

斧を持った男は声もあげられぬまま意識を失った。

俺はそのまま、斧を持った男の左後ろにいた曲剣を持った男に走る。約5メートルを3歩で0にする。

「なつこいつ!!」

何かほざいているが気にしない。奴の右に回り込み、右手で頭を押

さえて左手でひじ打ちを顔面にくらわした。

ガツン！！

ひじ打ちの衝撃が後ろに逃げずに直接脳揺らす。そのままその男は気絶した。

「もらったー！！！」

後ろから両刃の剣を持った男が剣を突き出してきた。

「甘いな」

俺は左後ろ回し蹴りで奴の剣をナイフを2本持った男の方へ飛ばし、さらに右回し蹴りを奴のこめかみにピンポイントで蹴りつけた。まだ、立っているなので右の横蹴りを奴の鳩尾に蹴り入れた。その男は後ろにぶっ飛び、気絶した。

さらに、俺はダッシュで最後の男に接近し、奴の左足のつま先を思いつきり踏みつけ、同時に手刀で左手首をたたき、ナイフを落とさせた。

「うわあああ！！！」

奴はナイフを刺そうと右手を突き出してきた。だが、俺の方が速いまず、奴の左手を引き寄せながら、さらに右手で奴のナイフの軌道をそらし、左のひざを奴の鳩尾に決める。とどめの左手のひじ打ちを奴の後頭部に決めた。

ガツン！！

最後の男も力なく地面に倒れる。

「・・・」



正直、ここに来る前の俺だったら、多分腕の1本くらいやられてたな。まあ、それでも4人全員倒していたがな。神に強化してもらったのと、俺の服装が神に殺される直前の学ラン姿だったおかげで、無傷で倒せたが。なんで、服装が出てくるかという俺は普段から革靴の底とかかたとつま先に鉄板を仕込んでいるからだ。そうじゃなかったら剣を蹴ったりできなかつただろう。

「す、すごい」

俺が後ろを振り向くとアリサが啞然とした表情でこちらを見つめていた。

side out

アリサside

止めなければ！！私はそれだけを考えていました。なぜなら、賢者の召喚陣から呼び出された人はそこまで体術が得意ではないと伝承ではあったからです。

だけど、その考えは簡単に打ち破られます。流迅様は斧で攻撃してきた男の腕を折り、その後、後頭部への一撃で気絶させてしまったのです。

しかも、速い！！日ごろから剣士として鍛えている私でも姿をとらえるので精一杯でした。

その後、流迅様は曲剣の男に突進し一撃で気絶させてしまいました。しかし、今度は直剣の男とナイフの男が流迅様に襲いかかりました。しかも、直剣の男の方は完全に流迅様の後ろから襲いかかってきます。

しかし、流迅様は後ろ回し蹴りでその剣を弾き、しかもその弾いた剣はナイフの男の方へ飛んでいき、ナイフの男は足を止めてしまいました。そのすきに直剣の男を気絶させ、その後ナイフの男に突進

し、相手のナイフを簡単によけその男を気絶させてしまいました。

「す、すごい」

私はつい呟いてしまいました。

「それほどでもないさ。それよりもここを早く離れた方がいい。こいつらの仲間がいるかもしれない。この程度だったら、大丈夫だが魔法だか魔術だか知らないがそういう俺がわからないもので攻撃してくると厄介だ」

流迅様はこちらを振り向いていました。

「そうですね。流迅様。下の広場に行きましょう」

と私は歩きだそうとしましたが、足元がフラフラしています。たぶん召喚魔法で魔力が尽きたのでしょうか。それを見ていたのか流迅様は肩を貸してくださいました。

「大丈夫か。あと、その口調なんかならない？」

「ありがとうございます。口調は敬語が素ですのでどうにもなりません」

リステイにも同じことを言われました。なんとか今ではリステイと2人の時は呼べていますが、慣れるのに時間がかかりました。

「そうか、じゃあ『様』をつけるのはやめてもらえないか？」

「わかりました。流迅さん」

そして私たちは丘を下りました。

〈side out〉

〈流迅 side〉

俺はアリサに肩を貸して、丘を下った。幸い盗賊やモンスターには出会わなかった。というかモンスターはこの丘にはいないらしい。なぜ、こんなことを思っているかというところノリで肩を貸してしまっただが顔が近い！！しかも、髪の毛から中々のいいにおいがつてまじい…落ち着け！！

そんなくだらないことを考えているうちに視界が開けてきた。

「もう少しで広場です」

「おう、了解」

やっと広場が見えてきた。そこには光輝と青色の髪をした美少女がいた。しかもなんか光輝の隣に寄り沿う感じに立っている。

もう、フラグ立てたのか。早いなあ。

「おーい、リュウー!!」

とアイツが手を振っている。隣の美少女もうれしそうな顔をしている。なるほど、アリサが無事だったのがうれしいのか。

「リステイも大丈夫そうですね」

アリサはうれしかったのか笑顔を見せてくれた。

「おっ。初めて笑ったな」

「え…いや、その」

「さてとっとと合流しますか。アチラさんも待ってるみたいだし」

「そうですね!!!」

俺たちは下の広場まで少し急いで、向かった。

side out

「リスティ side」

召喚された丘の下の広場で私は気が気ではなかった。アリサの魔法陣も光の塔が建っていたし、理論上は生きていて、賢者を召喚できているはずだけど、今までの歴史上賢者と勇者が同時に召喚されたことはない。だから、広場にアリサと黒色の服の少年の肩を借りて歩いてきたのを見たとき私はうれしくて泣きそうになった。

「よかったな。リスティの親友疲れているけど元気そうじゃん」  
「はい!!」

私は涙をごまかすように返事をした。光輝に涙を浮かべているのを見られるのはなんだか恥ずかしかったからだ。

「俺の親友も元気そうだし、良かったぜ」

そうしているうちにアリサたちがこの広場に到着した。

「リスティ!!」  
「アリサ!!」

アリサが抱きついてきた。私もうれしくて抱き合った。隣では光輝とその親友がハイタッチをしている。

「よう、光輝。なんにも問題なさそうだな」  
「へっ! 流迅こそ」  
「いや、こっちは色々あったんだよ」  
「色々あったってどういうこと!？」

私は気になって聞いた。光輝の親友は急に私が話しかけたからか少し驚いたような顔をしていたがすぐに普通の表情に戻り、

「あなたは、リステイナー・プレセリア様でよろしいのでしょうか？」

「ええ、そうよ。私はプレセリア王国第三王女であり第一巫女リステイナー・プレセリアです。しかし、名を聞く時はそちらから名乗るのが礼儀ではなくて？」

「失礼しました。リステイナー様。私は賢者の召喚魔法陣から召喚されました、真雲流迅と申します。こちら風に言つと流迅真雲です。そこにいる光輝とは親友です」

なんとも礼儀をわきまえた返答だった。

「私のことはリステイでいいわ。親しい人は皆そう呼びます。それよりも色々あったとはどういうつ。なにこれ！！地下の魔力があり得ないくらいに膨れ上がっている」

そして、地面が揺れ始めた。

「おい、リステイ！！その魔力つてのが膨れ上がるとどうなるんだ？！」

と光輝が聞いてきた。

「たぶん、このまま膨れ上がっていくと暴走して爆発が起こるわ！」

「くそ！！急いでここを離れるぞ！！！」

と言つて光輝は私をまたおんぶした。うう恥ずかしいノ隣ではアリサを流迅がおんぶしている。

「どこに逃げたらいいかわからない！！リステイかアリサ案内してくれ」

と流迅が声を張り上げます。

「ここから、王都サイナまでの道は私が案内します」

とアリサが宣言した。

「じゃあ俺とアリサが先行する。ついて来いよ、光輝!!!」  
「ああ、任せろ!!!」

私たちは急いで王都サイナまでの道を走りだした。

｝side out｝

## 第2話 流迅の力そして合流（後書き）

ここはあとがき…

作者の遊びが集まる場所

神「ふふふ。これでやっと始まる。

作者による物語ではなく、私による私のための作品が

怒「勝手をしてもらっては困るな」

神「怒涛号！！」

怒「僕は神を超え真の作者としてふさわしい存在になった」

神「くっそー！！」

怒「罰ゲーム！！」

神「うわあああああああ！！！！！！」

.....

流「バカやっている二人は置いておこう」

光「そうだな」

ライ「我の出番またないのだな」

ピナ「妾の出番…今回なかったのう」

怒「大丈夫だぜ。次回はライが出る予定だから」

ライ「そうか。ならよしとしよう」

流「それよりもこの投稿が今年最後なんだから。

つたく更新速度遅すぎなんだよ」

光「あつ！！次回は俺メインだつて！！やったあ」

流「あつ無視ですか。俺のこと無視ですか」

怒「まあ流迅が言っているようにこの投稿が今年最後です。

次回はもう少し早く更新できるように頑張るつもりですが

どうなるかわかりません。それでは次回予告を光輝」

光「了解！！」

王都サイナまでたどり着いた俺たちは  
王様が帰ってくるまでの3日間休息を得る  
その時の光輝の行動は?!

次回、『王都での3日間 光輝編』  
光輝、魔法を知る。お楽しみに」

流「なあ、怒涛号。神への罰ゲームって何？」  
怒「あとがきへ3話分の出場停止。つまりあと3話神は出てこない」  
流「ひでー」



### 第3話 王都での3日間〜光輝編〜（前書き）

まずは謝罪を

投稿が1カ月以上も遅れて申し訳ありませんでした。だいたい1カ月ペースを目標にしていたのですが今回はキャラの光輝が思った以上に使いにくくて苦勞してしまいました。なのでこの話はいつも以上に駄文です。

感想などをお待ちしております。

### 第3話 王都での3日間〈光輝編〉

〈第三者 side〉

光輝たちが広場から走りだして約10分後に召喚の双丘から爆発的な光が巻き起こり、その光が消えると同時に召喚の双丘はあつたところには何かを抉りとつたような跡が残っていた。

その光景を見た4人はそれぞれの表情をしていた。

金髪の少年はただただ驚愕の表情。青色の髪の少女はこの先を憂いているかのような表情。緑色の髪の少女は驚愕の表情の中に悲しみがある。黒髪の少年は…ただ無表情。喜怒哀楽のどれにも当てはまらない無表情。なにを考え、なにを思っているのか全く分からない表情であつた。しかし、その表情はすぐに消えた。

「さて、さつさと王都に行こうぜ」

「あ、ああ。そうだな。アリサ、王都まであとどれくらいだ？」

「……………」

「おい、アリサどうした!？」

おぶっていた流迅が回答を促す。

「は、ハイ。えっと、あと少しで到着できます」

そしてその4人は王都へ向かった。

〈光輝 side〉

俺たちが王都についたのは夕暮れ時だった。城壁に囲まれている王都はなんか綺麗だった。俺たちは城の裏側に回り裏口から城の裏庭に入った。(入るときに二人は俺たちの背中から下りている。なんだかりステイが残念そうにしていた気がする)さらに城の裏の入り口から城の中に入っていく。

「なあ。なんでこんなにこそこそしているんだ？」

疑問に思ったことを言う。そこにリュウが即答する。

「それは、簡単だ。俺たちの存在がまだ知られたくないんだろう。城の中にも敵のスパイがいるかも知れないし、ある程度力をつけるまでは信頼のおける人にしか俺たちの存在を明かさないんじゃないのか」

「そうね。それもあるし、今お父様は国際会議のため城を出ているの。本当は勇者様や賢者様の召喚に成功したら真っ先に王であるお父様に謁見するのが習わしなんだけど…たまたま、召喚に適した日に会議がしまったの」

ん〜よく分からなかったけどつまりは王様と会うのはもう少し先になるってことか。

「じゃあ王様ってどれぐらいで帰ってくるんだ？」

「今日を入れて後4日でお帰りになられます」

とアリサが答える。

次の質問をしようとしたところで

「後はこのお部屋で話しましょう。お母様もいますし」

.....

〜次の日〜

俺は今、王族専用の訓練場にいる。そして昨日の話で重要なことを思い出す。

・まず、王様はあと3日で帰ってくること

・そのときに謁見すること

・俺たちは街に出るのは自由だが城の中は王直属の騎士団とこの塔つまり王様やその家族が普段使う塔以外は行ってはいけないこと  
・ライとは念話と呼ばれるもので声を出さずに会話できること

とまあこんな感じの話だった。

(主よ。リステイ殿が来たぞ)

(ん。了解。サンキュー)

「では、光輝始めましょう」

俺はリステイに魔法を習うことになっていたので訓練場にいた。

この場にリュウはいない。リュウは別にやりたいことがあるらしい。

「じゃあまず、自分の魔力について把握してもらおう」

「え、どうやって?」

「自分の中を覗くように精神を統一させて」

そこで俺は正座をして目を閉じて自分の内面に意識を向けるように精神を統一させていく。

これは俺の瞑想方法だ。

内面に何か絡まるような力を感じた。しかし、それはいやな感じはせず、むしろ頼りになるような感覚がある。

また、この力とは別に何か力を感じる。でも、魔力と呼ばれているものは、多分絡まるような力だと思う。なぜならそれは自分の外に、というかライに流れている感覚があるからだ。多分それがパスって奴だと思う。

「うん。見つけたぜ」

「じゃあ、それを体に循環させてみて」

「ん。了解」

俺はその力を体に循環させる。感覚がクリアになっていく気がする。

「合格よ。これで光輝の魔力は光輝に最適な形になったわ。次は光輝の魔力属性を調べるわよ」

「なんだ？その魔力属性って奴は？」

俺は目をあげ疑問に思ったことを質問する。

「魔力属性っていうのはその人がどの属性が得意かを示すものなの。基本属性が5つあって、『火』『水』『雷』『風』『土』で、その上位属性が『光』『闇』。さらに古代の神々が使っていたといわれている古代属性が4つ『創造』『消滅』『空間』『時間』よ。古代属性は使える人はいるらしいけれどこの国にはいないわ。ちなみに私は『水』と『光』の魔力属性があるわ」

「へえ、なるほど。で、どうやって調べるんだ？」

「この水晶を使うのよ」

そこにはバレーボールぐらいの水晶があった。あれ？リステイはどこから取り出したんだ？来た時は持ってなかったぞ。

「じゃあ、これに手を当てて魔力を注いでみて。自分の中を循環している力を少し外に出すような感覚で」

水晶に掌を当てて、体の中に循環している力を掌から外に出すような感覚で水晶に魔力を注いでいく。すると水晶がピカツと光った。そしてなんとその水晶が話し出した。

「魔力属性ハ『火』『水』『雷』『風』『土』『光』『創造』『時

間』ガアリマス。魔力量ランクS」

「うそでしょ。すごい……魔法属性が基本の5属性全部あって上位の『光』さらには古代属性の『創造』と『時間』があるなんて。これが勇者の力なの？」

なんだかりステイが放心している。というかめっちゃめっちゃ驚いている。そんなにすごいのか俺の魔法属性。

「リステイ、大丈夫か？」

「あ、大丈夫よ。じゃあそろそろ基本的な魔法を教えるわね」

その後俺はリステイから魔法を教わり、基本魔法のほとんどが使えるようになった。

異世界の1日目はこうして終わった。

〜次の日〜

今日は王族騎士団長のゼラディ・パーシスさんが俺の力を見たいそうだ。なので模擬戦をすることになった。俺の武器は木刀。この世界に刀の概念があつたのに驚いた。しかし、あまり使用者が多いわけではなく木刀を迷わず選んだら、リステイにもゼラディさんにも驚かれた。ゼラディさんの武器は木剣。模擬戦の武器はほとんど木で作つてあるそうだ。

場所は昨日リステイに魔法を教わつた、訓練場だ。

「いや〜驚いたね。まさか、木刀を迷わず選ぶなんて。中々使いこなす人がいないんだよ」

とゼラディさんがほほ笑む。ゼラディさんの容姿は赤い髪を肩まで伸ばしている、25歳くらいでとてもりりしい感じの人だ。

「元の世界では主流の武器だったのでこの武器にしました」  
「そうかい。じゃあ、そろそろ始めようか」

ギンという音が聞こえてくるように目が鋭くなる。まるで剣のような目だ。

「ちょっと、待ちなさいよ。ルールの確認ぐらいしてもいいじゃない」

「申し訳ありません。リステイナー様。では、お願いいたします」  
「まず、魔法は禁止よ。勝利条件は相手に負けを認めさせた時、相手に一撃を加えたとき、相手を気絶させた時よ。いい？」

リステイは俺たちから離れ、安全なところに移動した。俺たちもある程度距離をとる。構えたところで、

「いくわよ。よーい。初め!!!」  
という声とともに模擬戦の幕が上がった。

開始とともにお互いに距離を詰める。ゼラディさんの上段垂直切りを刀を横にして左に受け流そうとする。くっ。すごい力だ。なんとか受けきり、右中段に刀をなぎ払う。だが、すんでのところで、相手は大きく下がりよけられてしまう。

「初撃を受け流し、反撃までするなんて、流石勇者と言ったところかな」

「こっちからしたら、よけられるとは思わなかったぜ」

「まあ、ぎりぎりだったけどね」

「そうかい」

軽い会話をしてお互いにまた距離を詰める。

ガン、カン、ガン!!

剣と刀が舞うように打ち合う。相手の攻撃は重く、鋭い。なんとか受け流し反撃をする。相手はそれを剣で受け止めさらに押し返してくる。一瞬間合いが離れたと思った次の瞬間には激突。模擬戦ということのを忘れさせるようなぶつかりあいだった。

「セイ!!」

「ラアアア!!」

ガンッ

お互いの渾身の一撃で互いに打ち出され、また短い距離ができる。セラデイさんの気配が変わる。おそらく次で勝負を決めようとしているのだろう。なら、俺も次で決めるようにしよう。

刀をだらりと右下段に下げる。相手は剣を大上段に振りかぶっている。

ダン!!

ほぼ同時に駆け出す。そして放たれる気合。

「ハアアアアアアア!!!!」

「うおおおおお!!!!」

相手は大ぶりの垂直上段切り。俺は刀を下段から振り上げるように切りつける。

一瞬の交差

ガン!!



剣と刀がぶつかり合いそしてすれ違う。お互いに武器を振りぬいた格好をする。その勝負の結果は　　俺の負けだった。俺の木刀は砕けていた。

「負けちゃったか」

「中々強かったな」

俺は右手を差し出しながら、頭を下げる。

「ありがとうございます」

「いや、こちらこそありがとう」

と握手をする。

「大丈夫なの。光輝」

「ん。大丈夫だよ。刀が砕けただけだし」

はあ。打ち合わずによけて切りつければ勝ってたけど、それやっちゃうと模擬戦の意味ない気がするし、喧嘩じゃないんだし。たぶん、リュウに言わせると甘いんだろうな。

「はあ、リュウになんて言われるか」

「流迅が光輝に文句を言うの？」

「ああ、実際一対一ならアイツの方が強いし、アイツには何回も助けてもらってるからな」

「え、君よりも賢者の方に召喚された子の方が強いのかい？」

「一対一のみだけだな」

「うそでしょ」

「じゃあ、試してみれば。昼食の時に誘ってみればいいじゃん」

その一言のせいで流迅が模擬戦をさせられることになるのだがそれはまた別のお話。

光輝の2日目は午前中に模擬戦を3回。結果1勝2敗相手はゼラデイ・パーシス。午後からは流迅の模擬戦を見学した後魔法の勉強という内容だった。

「次の日」

明日、王様が帰ってくるそうなので今日はそのための準備をするため、街に出ることになった。それなりの服を買わなければいけないそう。その時にリステイがガッツポーズをしていたのは何故なんでしょう。久しぶりに町に出るのがうれしいのかな。それとリュウも朝食のときに誘ってみたけど断られた。なんか呆れたような悟ったような顔をしていたのはなんでだ？まあいいか。

というわけで今日は街に出てショッピングだ！！

街はにぎわっていていい雰囲気だった。

「服屋さんはこっちよ」

とリステイに案内されたのはいかにも高級ですって感じの店だった。

「じゃあ、リステイ。案内してくれよ。俺はあまりこういう店来ないし」

「わかったわ。えっと……男性用の服はこっちよ」

.....

そして俺はスーツだけどころどころ元の世界と違うものを買ってもらった。そう、この世界では俺は無一文なんだった。

さらに普段着一式も買ってもらってしまった。色は白系で所々赤が入っている。なんか試着してみたらリステイが顔をリンゴみたいに真っ赤にしたのはなんでだ？

買ったものを持って服屋から出る。

「ありがとな、リスティ。自分でお金が稼げるようになったらしっかり返すよ」

「ふふ。どういたしまして。それとお金は返さなくていいから、ずっと大事に使ってくれとうれしいな」

「そっか。んじゃ大事にするよ」

大切に使うだけでお金はいらないなんてリスティはいいやつだな。

「そろそろ、腹減らないか？」

「なら、いい食事処があるわ」

そう言っでリスティは俺の手を取り歩き出した。そうやってきた場所は高級料理やだと思っていたが以外にもいい意味で味がある感じの店だった。

「ここ、すごくおいしいのよ」

「へえ。意外だな」

「なにが、意外なの？」

「いやさ、王族の人たちって高級料理店ばかり行くものと勝手に思ってたからさ。こんな平民も行くようなお店に行くんだって……」

「王族とて人なのよ。おいしいものはおいしいのよ。それに王族なんて運が良くてやっているだけなんだから」

「そっか」

そんな会話をしつつ、俺たちは店の中に入った。店内はとてもきれいだっただ。とそこでいかにも料理人ですって人が声をかけてきた。

「いらっしゃいー!!おっ!!リスティーナ様じゃねーか。しかも恋

人連れか？手なんてつないでよ。カ 見せつけてくれるね」

リステイは急激に顔をリンゴのように真っ赤にし俺の手を離し、その手をブンブン振り始めた。

「ち、違います！！わ、わた、私とこ、こつ、光輝はこここ恋愛などではなないわ！！」

うわーこんなに否定するなんて、なんか俺、嫌われてるのかな。

「へいへい、そうかい（この兄ちゃんかなりの鈍感だな）いつもの席空いてるぜ」

「ありがとうございます。行きましょう、光輝」

「お、おう」

なんか店長に失礼なこと言われた気がするけど……まあいいか。リステイと一緒に席に着きその後注文した後（俺は字が読めなかったので店長のお勧めにしてみました。ついでにリステイも何故かそれだった）料理を待つ間リステイが話しかけてきた。

「光輝は守護獣を持つているの？異世界から召喚された勇者や賢者は必ず持っている文献にはあったけど」

「守護獣？っていうか神獣ならいるけど。ライ出てこいよ」

と俺の言葉とともに俺の指輪が光り、肩に小さな金色のライガがいた。

「こいつが俺の相棒のライだ」

「今紹介に預かった、ゴールドライガのライだ。光輝を守る神獣をしている」

「私はリステイよ。よろしくね。ライ。さて私の守護獣はトウナ・ロナよ。まあいつか戦いの時にでも呼びだすわ」  
「そっか。了解。お！！飯が来たみたいだ早く食べようぜ」

食事が終わった俺たちは城に戻っていった。そして料理がすごくおいしかったのをここに記しておきたい。

＼side out＼

### 第3話 王都での3日間〜光輝編〜（後書き）

ここはあとがき…

作者の遊びが集まる場所

怒「……………（汗）」

流「おい、作者！！なんでこんなに更新が遅いんだよ！（怒）」

光「俺の話ってつくりづらかったんだ（泣&鬱）」

ピナ「なんとというカオス……………」

ライ「我の出番少なかった……………」

怒「次は速くするから許して流迅。」

光輝お前の話は書きにくいがこれから腕を上げてがんばっていくから許して

ライ、お前の出番はあとからきつとある大丈夫だ

ピナ、確かにここはカオスだ！！

ハアハア……………」

流「まあいいや次は俺がいや

ピナ「妾たちが主人公じゃしな」

ライ「では流迅殿、次回予告を！！」

流「いくぜ！！」

王都サイナで初めて流迅が感じたのは不信？！

自分の知らない世界を知るために流迅は図書館へ

そこで得た知識とは？

次回『王都での3日間〜流迅編〜（前編）』

流迅、魔導を知る」

光「どうせ俺なんて」

ライ「出番ほしいな」

怒「キャラが：光輝とライのキャラが崩れてるー！！」  
ピナ「カオスじゃな」

第4話 王都での3日間〜流迅編〜（前編）（前書き）

投稿が遅れて申し訳ありません。

色々ごたごたがあったものですから。

今回はほとんど説明です。



#### 第4話 王都での3日間〈流迅編〉（前編）

〈流迅 side〉

俺達は城に入るとまず王妃様と謁見したわけだが、まず、王妃様のイメージはいい王妃様って感じだな。道中アリサやリステイに話を聞いていたが孤児院も作ったみたいだしいい人なのだろう。それにアリサとリステイが無事だったことを心から喜んでいた感じだし、俺と光輝にはなんだか申し訳なさそうな顔をしていたし、優しい王妃様なのだろう。

だが、それゆえに甘い。街に出てもいいということとは街に出て、貴族やスパイに見つかっただらどうするつもりなのだろうか。俺と光輝などただの捨て駒だと思ってくれればいいのだ。そうしなければ心労で心がやられてしまうだろう。まあ人のことだし、閉じ込められるよりはましなので気にはしないが。

夕食の後メイドさんに聞いた話だが、どうもこの国は色々と勢力争いが面倒くさいことになっているらしい。宰相のリーバス公が筆頭の貴族派、第一大隊総大将にして総將軍のガーランド公が筆頭の軍隊派、王様や王妃様や王族騎士や一部の貴族たちの王族派の三つ巴状態らしい。まあ、素直にこの国に従うつもりはないのでどーでもいいが。

「流迅さん、あなたの部屋はこちらです。隣の部屋に私がいまさら、何かあったら読んでください」

「ん、サンキュ。アリサ」

「さんきゅ？」

「ああ、ありがとって意味だ。すまん。通じなかったか……明日図書館に行ってみたいのだが道案内頼めるか？」

「はい、大丈夫です。でも、何故、図書館に？」

「おいおい、俺がどこの魔法陣から召喚されたんだっけ？」

「賢者……ああ！分かりました。お任せください」

「じゃあ、明日朝飯のあとすぐに」

「はい」

そして俺は自分の部屋に入った。ベッドが天蓋付きだ。だが、俺はそれを考える余裕はない。そのベッドに倒れこむ。寝巻のようなものが置いてあったが無視。俺は初めて間接的ではあったが人を殺したのだ。ベッドに頭を沈めて嗚咽に耐え、目をつぶる。そうして数分。俺は既にふっきた。魔王を倒すという使命柄絶対に人を殺さなければならなくなる。ここに来た時から覚悟していた。そして実際に殺してその覚悟が確かなものになった。

「さて、寝るとするか」

俺は疲れていたのかすぐに眠りにおちた。

〜次の日〜

「知らない、天井だ」

(主、いきなりネタはよさぬか)

(ん、まあいいじゃん)

「さて」

俺は伸びをして立ち上がり伸びをする。肩をまわし、完璧に脳内を起こす。さて、暇になってしまったな。なにをしようかな？

そんなことを考えていると部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「流迅さん、朝ごはんの時間ですよ」

「おう、今行く」

食事のために大食堂に移動する。

食事を終え、俺はアリサの案内で図書館に向かった。俺はニット帽のような帽子をかぶっている。アリサ曰く黒髪はとも目立つそうだ。目立つのは俺としてはうれしくなかったので、城の人から帽子を借りた。図書館はとても大きかった。この国一番の大きさらしい。しかし、利用者はあまり多くないようだ。たぶん、今日が平日だということもあるだろう。

「流迅さん。図書館でなにをするんですか？」

「とりあえず、この世界の言語を理解する。また、文字の読みをできるようにする。目標は2時間。そのあとは魔法だか魔術だか知らんがまあ、言ってみれば魔力の運用法を専門書で完璧にする。目標は今日中。そんな感じかな。すまない。アリサにとってはつまらないものになりそうだ。」

「いえ、大丈夫です。私にできることがあれば言ってください。なんでもお手伝いしますよ」

「ありがとう。助かるぜ」

俺は図書館の中に入るととりあえず周りを見た。すごいな。本の数が半端じゃない。流石この国一番といったところか。俺はアリサに絵本とこの国の辞書のようなものを持ってくるように頼んだ。

さて、未知なる言語に挑戦しますか。

（1時間半後）

基本的にこの世界の言語は元の世界の英語と同じ感じだということが分かった。文法とかな。例えば、主語・述語・目的語などの順で文が構成されている。でも、文字自体は日本語と同じ感じだ。例

えば、「リンゴ」を表す時、音の文字だけで表すようだ。音の総数は母音が5、子音が9種類と日本語そっくりだ。略字と言って漢字に似たようなものである。また、国による方言のようなものはあるが基本的にこの世界の言語は統一されているらしい。

さて、なんとかこの世界の文章が書けるようになったな。試しに、『俺は流迅真雲です。俺は賢者です』という文章を書いてアリサに見せたら、完璧ですっていう評価を受けた。よし、もう少しめんどくさい文が書けるように勉強するか。

（30分後）

よし、なんとかこの世界の多少難しい文章でも書けるようになったし、読めるようになったぞ。これも『スキル』のおかげか。じゃあ、次は本題の魔力について調べるかな。お昼まであと1時間くらいあるしな。

「アリサ、頼みたいことがあるんだけど」

「……………」

返事がない、ただの屍のようだ……じゃなくて。あれ、アリサが放心している。まあ、ここは必殺の……

猫だまし！！ パチン！！

「ひゃう！！あれ、すみません。ボーとしていたようです」

ひゃう！！いただきました。じゃなくて。

「どうしたんだ？ボーとしてたみたいけど」

「いえ、あまりに早く文字を覚えてさらに書けるようになっていまずので少し驚いただけです」

「あーそっか。でもこれ、俺の場合はスキルがあるからな。人より

も早いのは自覚がある。つてか自分でも驚いている」

本当は読みだけの予定だったんだけどな。予想以上に欲がでて書きまでできるようになってしまった。

「どんなスキルなんですか」

「おいおい、そういうこと聞いてもいいのかよ」

俺は意地悪な笑みを浮かべる。するとアリサは急にシュンとした顔になった。

「あ、すみません。でも、気になったのでつい……ダメでしょうか」

「ダメでしょうか」の時に無意識なのか分からないが上目づかいになっている。やべっ。かわいい。じゃなくて、落ち着け……よし、落ち着いた（この間わずか1秒）。ある程度俺の戦力を開示していた方がいいかもしれんし、教えとくか。俺の戦闘も一度見られているし（この思考をまとめるのに2秒）。何気に流迅は『賢者』のスキルにある平行思考マルチタスクを使いこなしている。

「ダメじゃない。俺のスキルの中に『瞬間記憶能力2』と『理解・応用』があるからな。それにこの世界に来て全体的な能力が上がった感じがするんだ」

「なるほど」

「さて、話を戻して頼みたいことがあるんだが、いいか」

「はい、なんででしょう」

「魔法とかが書いてある書物の棚に案内してほしい」

「こちらです」

案内された本棚を見る。たくさんある本の中で目を引く本があった。賢者のスキルのおかげなのか、それともただの勘なのか分から

ないが俺はその本を手を取った。タイトルは『魔力と魔導について』。  
アリサと共に座っていた席に戻り、本を読み始める。

〈1時間後〉

この本に書かれていたことをまとめると

- ・魔力とは生物や無機物に大小はともかく必ず存在すること。
- ・魔導とは自らに宿る魔を導くという意味であること。（ここの魔は魔力のことらしい）

- ・つまり、魔法や魔術は魔導の中のものであるということ。

- ・魔力はあるだけではないにもできない。魔力は循環することで様々な現象を生み出せること。

- ・この大地自体にも魔力がある。また、地下内部で循環している。それを地脈と呼ぶこと。

- ・人や幻獣、守護獣、魔物、魔人、亜人などの魔力には属性があること。

これら以外にも書かれていたが、細かいことや論理のたぐいだった。また、この本は半分ほどしか読んでいないが昼食の時間が迫ってきたので午前はこれくらいにしよう。

「流迅さん、そろそろお城に戻りましょう」

「そうだな。昼の時間だからな」

「また、午後からもここに来るのですか？」

「ああ、そのつもりだ。今日中に魔導を詳しく知っておきたいからな」

「分かりました」

〈昼食後〉

俺たちは図書館に戻り、また同じ本を読み始めた。第2章からは魔法と魔術について書かれていた。その本の文面はこんな感じだ。

『魔法と魔術、現在では同じような扱いになっているが実は全くの別物である。まず、魔法の定義から示していこう。魔法とは魔力を使ってイメージした現象を現実世界に引き出す方法である。そのため、呪文の詠唱などでイメージしやすくする場合が多い。そのため、使用する魔力が大きければ大きいほど現象を正確にイメージする想像力が必要である。次に魔術とは術式に寄って決められた現象を自分の魔力や地脈、空気中の魔力を使って発現させる方法である。これも魔力が大きい方がより大きい現象を発生させることができるが地脈などを使うとより効果的である。また、各国の首都にも魔術は使われており、地脈を用いて半永久的に発動させているがそこまで大きな効力はないようだ。』中略』

〜2時間後〜

やっとこの本が読み終わった。分かったことをまとめると

- ・魔法は呪文を詠唱するが元となるのは想像力で、想像力さえあれば無詠唱も可能である。魔法は自分の魔力属性ない場合は発動できない。

- ・魔術は術式を用いるため詠唱はないが魔法より魔力効率がいい。また、自分の魔力属性ではないものも発動できる。

- ・魔力属性とは基本属性に『火』『水』『雷』『風』『土』の5種類。『雷』は最近属性として確立されたもので元々は風の一部と思われていた。さらに基本属性の発展の応用属性は基本属性を極めたものが使っているがその種類は様々である。例をあげると『火』の応用属性の『毒』、『土』応用属性の『木』などである。また、未確認ではあるが『剣』や『槍』などという属性があるらしい。上位属性に『光』『闇』これを使えるものは少なく、希少である。古代属性が『創造』『消滅』『空間』『時間』の4種類で使えるもの

は世界で数名らしい。

・魔法や魔術を使う時に世界からの妨害がある。それが『世界の修正力』である。どんな妨害かというと、例えば火の魔法を使い火を出す但其の火は温度が低かったりなどして殺傷力が低い。しかも、木などに燃え移らないといった現象がある。それを解決するためには、火種用の魔法を使うか、魔力を込めなければならぬ。しかし、精神力が高いとその必要がなく、普通の火になる。まあ、言ってみれば魔法や魔術の副作用みたいなものだ。威力の高い魔導や古代魔導などは使った術者にも『世界の修正力』が働く。症例は頭痛や目眩、気絶。最悪の場合は死に至るケースもある。

・無属性の魔導も存在する。これといった魔力属性は必要なく発動できるものだ。

こんな感じのことがこの本から読み取れた。後は数冊借りて魔導の練習してみるか。

「なあ、アリサ」

「何でしょう」

「ここって本を借りられるのかな？」

「大丈夫ですよ。借りられます。私がここの借用証を持っていますので」

と言って取り出したのは青色のカード。この世界にも図書館カードあるんだ。と元の世界との共有点にうれしさを感じる。

「それじゃあ、頼む。それと明日魔導の練習をしたいんだが、どこかいい場所はないか？」

「いい場所とはどういうことですか？」

「ああ、魔導が使えるようになって、驚く光輝の顔が見たいので。誰にも見つからない場所で頼む。アリサにはばれるけど、光輝や他



のみんなには秘密にしてくれるだろう?」

「ええ、それは面白いかもしれませんが。それに私はあなたに命を救われた時点でなにがあるうとあなたの味方です。流迅さんが秘密にしたいのであればそれを守ります」

俺はその言葉について目を細め鋭い目つきになる。俺は信用していないのか彼女を……いやここまで言っているアリサを信用しないのか、俺は……

「たとえ俺がこの国と敵対し、離れることになってもか?」

「……はい。私は、アリサ・ウイステインはなにがあるうとあなたの味方です。それが召喚した私の責任であり、巫女としての義務です」

「そうか……。なら俺も信用しよう。それに俺がこの国と敵対する理由は今のところないからな」

「そうですね。それと話を戻しますが、魔導の練習は街の近くに森がありますのでそこがいいかと」

「そうか。じゃあ、明日案内してくれ」

そうして日が暮れていき、俺の異世界1日目が終わった。この日に信頼できる仲間が……いや、友が異世界で初めてできたのだっ

〈side out〉

#### 第4話 王都での3日間〜流迅編〜（前編）（後書き）

ここは後書き…

作者の遊びが集まる場所

流「なあ、怒涛号」

怒「なんだよ、流迅」

光&流「なんだよ！！この説明文は！！しかも前編ってこと後編もあるのかよ！！」

怒「あるぞ。1日目が長いのは仕方ない。だって、魔法や魔術の説明だもん」

光「俺は1話で終わったぞ。なんで流迅は2話以上続くんだ！！」

怒「お前に説明文はキャラではないわ！！」

光&流「うっ。確かに」

怒「ということではピナ次回予告をよろしく」

ピナ「なぜ妾なの 怒「本編で出番が少ない神獣たちへの配慮だが？」

うむ。ならばやろう。

主の残りの2日間とは！？

主は魔導を極めていく。

自分の巫女を除いては誰にも知られずに…

『王都での3日間〜流迅編〜（後編）』

流迅魔導の力を得る。

主の活躍見逃すでないぞ！！」

流「ところでライは？」

ライ「私の出番は後書きにもないのか（泣）」

怒「あ、ゴメンm（――）m」



王都での3日間〜流迅編〜（後編）（前書き）

遅れてしまい申し訳ありませんでした。

最近時間がなくずるずるとここまで遅れてしまいました。

次話をもっと早く投稿したいと思います。

## 王都での3日間〈流迅編〉（後編）

〈流迅side〉

闘技場に俺と王族騎士団長ゼラディ・パースと対峙している。

奴の武器は木剣。俺の武器は木の短剣。

「君の方が勇者の彼より強いと聞いてね。つい、手合わせしたくなつたよ」

「ほう、手合わせするのはいいが、賢者の俺に負け、恥をかくのは貴様だぞ」

「……言ってくれるね。私はそこまで、弱くはないよ」

「人はそれをうぬぼれという。自分の技量も分からんか。騎士団長がこれではこの国の騎士も程度が知れるな」

「私のことは何と言われようとかまわんが、部下のことまで、いや、我が国のことまで汚すのは許さん」

ゼラディが臨戦態勢に入る。俺も構える。

さて、何故俺が闘技場で模擬戦をしているかを振り返ってみよう。

〈回想〉

今日、俺は森でアリサと魔導の勉強をしていた。勉強の内容は初級魔法から中級魔法、そして初級魔術と中級魔術だ。ちなみに俺の魔力属性は基本属性5種類と上位属性の『闇』古代属性の『消滅』と『空間』だったアリサがひどく驚いていたがすぐに持ち直した。本を見ながら、また、感覚的なことはアリサに聞きながら練習した。そして、それが終わり昼食に城に帰り、食べているところに光輝と

リステイと騎士っぽい男がやってきた。

「食事中すまないね」

「何でしょう。ゼラディ様。何かご用でしょうか」

「君に用はないよ。アリサ嬢。僕が用があるのは賢者の君だよ」

「ん、なんだよ。俺に用って」

「私と模擬戦をしてくれないかな」

は、いきなり、なに言っただやがる。

「おいおい、俺がどこの魔法陣から召喚されたか知らないわけではないだろう」

「だが、1対1なら勇者の光輝より強いと聞いたんでね」

チツ光輝め、余計なことを。こうなっては受けるしかあるまい。模擬戦だとアイツは相手に合わせて戦うからな。本気の戦いや喧嘩だと手段を選ばない。

「模擬戦だとな。喧嘩とか命をかけた戦いだったら、光輝の方が強い。まあ、分かったよ。時間はこれより30分後。場所はそちらが決めてくれてかまわない」

「うむ、ならば第一訓練場で待っているよ」

そういつとゼラディは去っていった。

「良かったのですか？」

「別に問題はないな。そう簡単には俺は負けないよ」

「それはどういう？」

「まっ、見てのお楽しみだな」

〜30分後〜

俺とアリサは闘技場に到着した。ゼラデイが木剣を持って闘技場の真ん中に立っている。

「うん、来たみたいだね。そこにある武器を選びたまえ。全部木でできているから、余程のことがない限り、死にはしないよ」

見た感じ、そうだろうな。俺は木でできた短剣を手にとった。本当はなんでも良かったのだが、まあ短剣で十分だろう。

「ルールは魔法等禁止また、氣も禁止とします。降参または氣絶した方の負けです」

とリスティが説明する。どうやら、リスティが審判をするらしい。ルールは簡単だったが把握した。俺とゼラデイが向かい合う。そして冒頭部分に戻る。

〜回想 終〜

ゼラデイは俺にここまで言われたのに殺気ではなく闘気を放っている。だてに騎士団長を名乗っていないというわけか。ゼラデイは剣を正眼に構え、俺は左手の人指し指と中指でメガネをずり上げる。

ゼラデイは突進体制に入り、

「王直第1騎士団長ゼラディ・パーシス、参る！！」

俺はメガネをずり上げた指を相手に突きつけ、

「貴様の驕り…今ここで結果と共に砕け散る！！……賢者、真雲流  
迅、迎え撃つ！！」

それを見たりステイは右手を挙げ、

「試合開始！！」

と宣言した。と同時にゼラディは爆発したかのようなダッシュをし、その勢いそのままに木剣を振りかざし、上段からの右側からの袈裟切りを繰り出した。だが、俺はそれをわざとぎりぎりで避ける。ふむ、これは中々、早い剣筋だな。ただ、光輝よりは遅いか。ゼラディはそのままなれた動作で切り上げにつなぐ。俺は後ろに下がって避け、そこから派生した突きを半身になるだけでかわす。さらに横薙ぎが襲ってきたので、後ろに大きく跳びつつ、短剣で受ける。

ガンッ！！

さて、仕切り直しといったところか。今の立ち合いで大体は読め



た。まあ、全力ではないだろうがな。

「避けてばかりかい？さっきの威勢はどこへ行ったんだか」

「ふん、貴様の剣は賢者に簡単に避けられるような甘い剣というところか」

「……言ってくれるね」

ゼラディが突進してくる。俺はその攻撃を避ける。さて、まだ舞台は始まったばかりだ。

〈side out〉

〈光輝 side〉

俺は客席から流迅の試合を見ている。アイツはいつもの戦い方をしているようだ。初めの攻防が終わったようだ。これで、ほぼ流迅は負けないな。

「流迅の勝ちか」。まあ、予想はしていたけどさ」

「どういうことですか？光輝様、流迅さんはただ避けているだけのように見えますが」

と流迅を召喚した巫女さん……アリスが聞いてくる。そう、流迅はまだ避け続けている。理由は分からないが、ゼラディさんの流れるような連続攻撃をかわして、かわして、かわし続けている。本当だったら、もう決着はついていてもおかしくないのに。

「あれが、あいつの戦い方なんだ。相手の技量を初めの何回かで見切り、その後絶対に避けられないカウンターを決める。どんなに力があってもアイツにとっては無意味なんだ」

「そうなんですか」

「リュウには『俺の情報は誰にも明かすなよ』って言われているけど、リュウは君を信用していたみたいだからね。このことは誰にも言っではダメだぜ。俺が怒られちまう」

「わかりました」

流迅のことだからこの城をすぐに立ち去るかもしれない。アイツは集団にいることを嫌うからな。  
ん。そろそろ動きだすみたいだ。

〈side out〉

〈流迅 side〉

そろそろ遊ぶのも終わるとするか。だいたい俺の身体能力を把握した。今までの2〜3倍程度に動けるようになってるな。アリスの話だとゼラディの体力ランクはAランクらしい。俺はSランクだがあんなにパワーが出るとは思えない。おそらくランクは総合結果なのだろう。俺はスピードに特化したSランクでゼラディはパワーに特化したAランクなんだろう。

これまで避けた回数33回、短剣で受け流した回数5回。これでゼラディの39回目の攻撃だ。

「くっ！いつまで逃げているつもりだ！！」

罵声と共にふるった垂直切りは俺が大きく後ろに下がったことにより空を切った。その剣をもう一度振り上げ、突撃の姿勢をゼラディは取る。

「はあああああ！！」

突進と共に垂直切り。

その攻撃を俺は体を半身にしなからすれ違うようにすり抜けゼラ  
デイの首に持っていた短剣を突き付けた。突き付けたというより押  
しつけたというべきか。あまりに密着していて剣先を突き付けるだ  
けの距離がないからだ。

「勝負あり!!」

リスティの声が響いた。

「驚いた。僕の負けだよ。勇者の彼より強いっていうのはあながち  
間違っではなさそうだね」

「さあ、どうだかな。俺も用事があるからな。これでお暇させても  
らうぞ」

と言って短剣を戻してから闘技場を後にした。

「待ってください流迅さん」

その後、俺たちは図書館で魔術書や魔法書を読み、魔導の練習を  
した。

～次の日～

明日王様が帰ってくるらしい。俺はその準備つまり服系統をなん  
とかしないといけないそうだ。まあ学ランでもいいとは思うが流石  
に異世界の服装ではまずいそうなのでこちらの世界のスーツのよう  
な服を買いに行くそうだ。

「今日、一緒に服買い行かないか？」

と朝食の時に誘われた。

「いや、いいよ。俺は色々用事があるからリステイと2人で行ってきな」

と断った。

だって、リステイがすごく睨みつけてくるんだもん。完璧に光輝に惚れたな。というわけでデートの邪魔をしてはまずいからな。うん、前の世界でも慣れていてけど、こういうのを邪魔すると女の怒りはひどいもんだからな。3年くらい一緒にいるがよくわかる。そして朝食を食べ終わりアリサと一緒に街に出た。

~~~~~  
とりあえず、服は買ったしこの辺の武器屋の位置も把握することができた。驚いたのが、服屋でアリサが暴走したことだ。危うく着せ替え人形をやらされるところだった。

明日は、王様との謁見だ。どんな王様なのかしっかり拝見してやるぜ。

＼side out＼

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8521/>

とりあえず異世界・・・ハア・・・orz

2011年7月31日07時59分発行